

戦争研究の現代的課題

地域における軍用施設に対する住民の意識の変化

—東京都北区を例として—

那波泰輔（一橋大学大学院）

1. 目的

本報告の目的は、地域において軍用施設に対する住民の意識がどのように変化していったのかを、東京都北区の軍用施設から考察を行うことである。

北区での軍用施設に対する住民の意識や動きを考察することは、地域において各時期で軍用施設がどのようにイメージされ、また住民の戦争体験がいかに関わったのかを明らかにすることができると思われる。

2. 方法

聞き取り調査と収集資料に基づいて、北区での軍用施設に対する住民の意識の変化を検証し、考察する。

3. 結果

戦前の北区において、軍用施設は地域の発展に貢献した。住民もはじめは軍用施設に対して否定的であったが、それがもたらす経済的な効果や災害時での軍の協力により、住民も好意的になっていった。しかし、北区は軍用施設が多く存在していたために、集中的な空襲を受けることになり、戦争で多大な被害を出した。

戦後では国などに管理されている旧軍用施設であった土地を解放し利用することが、戦禍を被った北区の復興のために必要となった。1968年の王子野戦病院反対運動は北区にベトナム戦争の傷痍兵を収容する施設を設置したために、住民以外にも巻き込んで起きた大きな運動であった。この運動によって、北区は王子野戦病院を撤退させ、その土地を所有することになった。

4. 結論

北区における軍用施設に対する住民の意識は、戦前では好意的なものであったが、戦後初期では戦争被害の原因とされ、国などが所有しているので北区のために利用できない場所として否定的な見方をされるようになった。軍用施設の土地を北区の管轄にしようとすることは、国によって奪われた土地を取り戻すことでもあった。